HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	世親『法華論』訳注 (3)
Author(s)	藤井, 教公; 池邊, 宏昭
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 111, 1-70
Issue Date	2003-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34058
Type	departmental bulletin paper
File Information	111_PR1-70.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

世親『法華論』訳注(3)

藤井教公・池邊宏昭

一、はじめに

本稿は先に刊行した菩提留支訳『法華論』の訳注、「世親『法華論』訳注(2)」に続くものである。本稿の内容は譬喩品の最初から経の最後までを扱っている。これによってこの『法華論』訳注は完結する。本稿に先立つ訳注(1)及び(2)は、筆者藤井が平成八年度と十三年度に北海道大学文学研究科大学院の演習として『法華論』を演習形式で講読した際に、演習に参加した大学院生諸君が用意した原稿について授業で検討を加え、さらに後に形式の統一を調えるとともに訳文などに全体的見直しを施したものであった。このたびは、二度に亘って筆者の演習に加わり、先の訳注(1)(2)の原稿作成にも大きく関わった池邊宏昭君が原稿を作成し、それに藤井が訂正や補いの筆を加えて出来上がったものである。したがって原稿作成の労の多くは池邊君に負っているが、結果についての責任は藤井・池邊の二人が等しく

負うものである。思わぬ過誤や力不足による誤りがあるかもしれないが、大方の批正を請う次第である。

二、凡例

一、本稿は、『大正新脩大蔵経』巻二十六所収の菩提留支訳テキストを依用する。尚、テキストの提示は、『大正蔵』に準じたが、旧字体は新字体に改め、適宜、句点や中黒点を補った。また、テキストの見出し部分に付した頁数は、『大正蔵』の該当個所を示す。「勒」とは勒那摩提訳である。

例、【テキスト】(p.1a,l.1)

(勒、p.10c,l.1)

一、本稿は、『法華論』上下二巻のうち、『法華経』譬喩品以下、経の最後部分までに対する註釈について、書き下し、現代語訳、訳注を付したものである。

一、書き下し文は現代仮名遣いにより、新字体を用いた。

一、テキスト部には、勒那摩提訳との語句の相違を注記し、書き下し文中には、内容的な注記をつけた。

一、注番号は当該語の最後につけた。

例、転不退転[1]法輪。

[1] 勒那摩提訳には、「転」の字を欠く。

経の如く[2]「婆伽婆は王舎城の耆闍崛山中に住したまいし」が故なり。

[2]『妙法華』「仏住王舎城耆闍崛山中」（『大正蔵』第九巻、一頁下、一九行目）と対応する。

一、経文・法華論のテキストの引用には鍵括弧「　」をつけ、言葉を補うときは角括弧［　］を、意味の補足・語句の言い換え等は丸括弧（　）を用いた。

例、経の如く「婆伽婆は王舎城の耆闍崛山中に住したまいし」が故なり。

『［法華］経』において「尊師は、王舎城の耆闍崛山の中にとどまられ」とあるように。

第八地以上の無功用智は、下（第六地以下）と上（第七地）と異なっているからである。

一、『法華経』からの引用と思われる箇所については、梵本（南條・ケルン本、KN.と略記）の文句との対応を検討し、注記した。

一、『法華論』の解題は本稿に先立つ世親『法華論』訳注(1)（『北海道大学文学研究科紀要』一〇五号、二〇〇一年十一月）を参照されたい。なお、訳注(2)は同『紀要』一〇八号（二〇〇二年十二月）の所収である。

『妙法蓮華経憂波提舎』科段分け（譬喩品以下）[1]

法華経本文引用
引用偈文解釈
七種譬喩
　七種具足煩悩染性衆生
　七種増上慢心
　　七種対治
三種平等
　三種無煩悩人三種染慢
　三種平等・対治
　　授記所由
　　声聞菩薩得記不同
　　受記不同
　　声聞得記不得記
　　三乗一乗
十無上

無上の義
一無上～七無上
八無上
九無上・十無上
多宝如来塔
第十勝妙義（法力・持力・修行力）
法力
証門
信門・供養門・聞法門
読誦持説門
持力
修行力
受持名号
跋文

1　この科段分けは諸注釈に基づき独自に作成したものである。

法華経本文引用

【テキスト】(p.8a,*ll*.3-8)

(勒、p.15b,*ll*.5-10)

譬喩品第三

尊者舎利弗所説偈言[2][3][4]

金色三十二　十力諸解脱

同共一法中　而不得此事

八十種妙好　十八不共法

如是等功徳　而我皆已失

【書き下し文】

譬喩品第三

尊者舎利弗の説ける所の偈に言く。

金色、三十二、十力、諸の解脱、

同じく共に一法の中にして　而して此の事を得ず。

八十種の妙好、十八の不共の法、

是くの如き等の功徳、而も我、皆な已に失えり。[5]

【現代語訳】

尊者舎利弗の説いた詩頌にこのように言う。

金色［に輝く身体］、三十二［相］、十力、多くの解脱、

［これらを具える仏と］同じようにともに一つの法の中にありながら、［私は］これらのものを得ることができません。

八十種のすばらしい相と、仏にだけ具わっている十八のすぐれた特質、

このような特性は、すべて私にはもう失われてしまっております。

2 勒那摩提訳には、「尊者」の語を欠く。
3 勒那摩提訳には、「所」の字を欠く。
4 勒那摩提訳には、「言」の字を欠く。
5 「金色、三十二」以下、『妙法華』譬喩品中の文と同一。（『大正蔵』第九巻、十頁下）また、対応する梵文は次の通りである。

dvātriṃśatilakṣaṇa mahya bhraṣṭā suvarṇavarṇacchavitā ca braṣṭā /
balā vimokṣāścimi sarvi riñcitā tulyeṣu dharmeṣu aho'asmi mūḍhaḥ // 5 //
anuvyañcanā ye mahāmuninām aśītipūrṇāḥ pravarā viśiṣṭāḥ /
aṣṭādaśāveṇika ye ca dharmās te cāpi bhraṣṭā ahu vañcito'smi // 6 //(KN.,p.62,*ll*.1-4)

引用偈文解釈

【テキスト】(p.8a,*ll*.9-24)

(勒、p.17b,*ll*.11-22)

釈曰。[6]此偈示現何義。尊者舎利弗自呵責身言。[8]我不見諸仏不往諸仏[9]所及聞[10]仏説法。[11]不供養恭敬諸仏。無利益衆生事。[12]於未得法退。[13]尊者舎利弗作如是等呵[15]責自身。不見仏者。[16]示現不[17]見諸仏如来大人之相。[18]不[19]生恭敬供養心故。往仏所[20]者。示現[21]教化衆生力故。放金色光明者。示現見仏自身異身獲[22]

【書き下し文】

釈して曰く、此の偈は何の義を示現するや。尊者舎利弗、自ら身を呵責して言く、「我は、諸仏を見ず、諸仏の所に往かず、及び仏の説法を聞かず、諸仏を供養恭敬せず。衆生を利益することなく、未だ法を得ざるによりて退きぬ」と。

尊者舎利弗、是れ等の如く自身を呵責せることを作せり。

仏を見ずとは、諸仏如来の大人の相を見ざるを示現す。恭敬・供養の心を生ぜざるが故なり。

得無量諸[23]功徳故。聞説法[24]者。示現[25]能作一切衆生之利益故。[26]力者。示現[27]衆生有疑依十種力断彼疑[28]故。供養者。示現[29]能教化衆生力故。十八不共法者。示現[30]遠離諸障礙故。恭敬者。示現[31]出生無量福徳。依如来教得解脱故。以[32]人無我及[33]法無我。一切諸[34]法悉皆平等。是故尊者[36]舎利弗自呵責身言[37]。我未得如是法故[38]。於未得中退故。

仏所に往くとは、衆生を教化する力を示現するが故なり。[39]

「金色」の光明を放つとは、仏の自身と異身[40]を見て無量の諸の功徳を獲得せるを示現するが故なり。

説法を聞くとは、能く一切衆生の利益を作すを示現するが故なり。[41]

「力」とは、衆生に疑有らば十種の力に依りて彼の疑を断ずるを示現するが故なり。

供養とは、能く衆生を教化する力を示現するが故なり。[42]

「十八不共法」とは、諸の障礙を遠離せるを示現するが故なり。[43]

恭敬とは、無量の福徳を出生し、如来の教えによりて解脱を得ることを示現するが故なり。[44]人無我及び法無我を以て、一切諸法は悉く皆な平等なり。是の故に尊者舎利弗は自ら身を呵責して言く、「我は未だ是くの如きの法を得ざるが故に、未だ得ざるによりて中ごろ退くが故なり」と。

【現代語訳】

注釈していう。この詩頌はいかなる意義を示しているのか。尊者舎利弗は自身を呵責して「私は、仏たちを見ることなく、仏たちの所に往くことなく、仏の説法を聞くことなく、仏たちを供養し恭敬することがなかった。[そのために]衆生たちを利益することがなく、[私が]未だ法を得ていないことから、中途で[仏となることから]退いてしまっ

た」と言っている。尊者舎利弗はこのように自身を呵責したのである。

仏を見ることなくというのは、諸の仏・如来の偉大な人の容貌を見ることがないということを示している。恭敬・供養の心を生ずることがないからである。

仏の所に往くということは、衆生を教化する力を示現することだからである。[従って舎利弗は仏の所に往っていないので衆生を教化する力を有しないのである。]

[仏が]「金色」の光明を放つとは、[それを見る者が]、仏の本来の身体と化身とを見て、量りしれないほど多くの功徳を獲得することを示しているからである。[従って舎利弗は仏が金色の光明を放つのを見ていないので、そのような功徳を獲得していないのである。]

説法を聞くというのは、すべての衆生を利益することができることを示すからである。[従って舎利弗は説法を聞いていないので、すべての衆生を利益することができるというわけではないのである。]

「[十]力」というのは、衆生に疑いがあるならば、十種の力によってその疑いを断ち切るということを示しているからである。[従って舎利弗は十力を得ていないので衆生の疑いを断ち切ることができないのである。]

供養というのは、よく衆生を教化する力を示しているからである。[従って諸仏を供養しなかった舎利弗は、諸仏が衆生を教化する力を有しているということを知らないのである。]

「仏にだけ具わっている十八のすぐれた特性」というのは、[仏が]諸々の障碍を遠離していることを示しているからである。[従って舎利弗は仏を供養しないのでこの十八不共法を見ないのである。]

恭敬というのは、量りしれないほど多くの福徳を生み出して、如来の教えによって解脱を得ることを示しているか

らである。[従って舎利弗は仏を恭敬しないので解脱を得ることができないのである。」

人にはアートマンのような実体が存在しないこと、一切の存在には実体がなく、すべて縁起生であり、一切万物は悉く皆な平等である。

このようなことから尊者舎利弗は自身を呵責して言うのである。「私はこのような法を未だ得ていないので、それで中途で[仏となることから]退いてしまったのだ」と。

6 勒那摩提訳には、「釈曰」の語を欠く。
7 勒那摩提訳には、「尊者」の語を欠く。
8 勒那摩提訳には、「言」の字を欠く。
9 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
10 勒那摩提訳には、「及」の字を欠く。
11 勒那摩提訳には、「仏説」の語を欠く。
12 勒那摩提訳には、「於」の字を欠く。
13 勒那摩提訳では「退」の後に「故」の字を加える。
14 勒那摩提訳には、「尊者」の語を欠く。
15 勒那摩提訳には、「作如是等」を欠く。
16 勒那摩提訳には、「仏」の字を欠く。
17 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
18 勒那摩提訳には、「之」の字を欠く。
19 勒那摩提訳には、「不」の字を欠く。
20 勒那摩提訳には、「仏所」の語を欠く。

21 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
22 勒那摩提訳には、「獲」の字を欠く。
23 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
24 勒那摩提訳には、「説法」の語を欠く。
25 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
26 勒那摩提訳では、「能作一切衆生之利益故」を「能作利益一切衆生故」とする。
27 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
28 勒那摩提訳には、「彼」の字を欠く。
29 勒那摩提訳には、「能」の字を欠く。
30 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
31 勒那摩提訳には、「示現出」を欠く。
32 勒那摩提訳には、「以」の字を欠く。
33 勒那摩提訳には、「及」の字を欠く。
34 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
35 勒那摩提訳には、「悉皆」を欠く。
36 勒那摩提訳には、「尊者」の語を欠く。
37 勒那摩提訳には、「言」の字を欠く。
38 勒那摩提訳には、「故」の字を欠く。
39 吉蔵は「若往佛所知佛者。有示現教化衆生之力。便不取小果。今遂不往佛所便取小果失化物之力也」（『大正蔵』第四十巻、八一四頁中）と注釈している。つまり、もしも舎利弗が仏所に往ったならば、彼は衆生を教化する力を得ているはずである。しかし、彼は仏所に往かず、小乗のさとりを得てしまい、衆生を教化する力を獲得していないというのである。
40 吉蔵は自身と異身について「自身即是本身。異身謂化身也。見此二身即獲無量福。」（『大正蔵』第四十巻、八一四頁中）と注釈してい

る。

41 吉蔵は「若聞佛説法知佛能作利益之事。便不取小果也。今不聞法便不知此事。故取小果也」（『大正蔵』第四十巻、八一四頁中）と注釈している。

42 吉蔵は「以供養仏知示現教化衆生力故。今遂不供養即不知此事」（『大正蔵』第四十巻、八一四頁下）と注釈している。

43 吉蔵は「以仏有十八不共法無諸過失故可供養」（『大正蔵』第四十巻、八一四頁下）と注釈している。

44 吉蔵は「以恭敬仏故得無量福及得解脱。以不敬仏便失此利」（『大正蔵』第四十巻、八一四頁下）と注釈している。

七種譬喩

【テキスト】(p.8a, *ll.*25-29)

(勒、p.17b, *ll.*22-26)

自此以下。[1]次為七種具足煩悩染性[3]衆生。説七種喩。対治七種増上慢心。[4]此義[5]応知。又復次為三種染慢[6]無煩悩人三昧解脱身[7]等染慢[8]。対治此故説三種平等[9]。此義[10]応知。(身下丹本有見字)

【書き下し文】

此れより以下、次に七種に煩悩の染性を具足せる衆生の為に七種の喩を説きて、七種の増上慢心を対治す。此の義応に知るべし。又復た次に三種の染慢・無煩悩の人の三昧・解脱・身等の染慢[11]の為に、此れを対治するが故に三種の平等を説く。此の義応に知るべし。

【現代語訳】

これより以下は、[『法華経』は]次に、煩悩の汚れをともなった七種類の衆生のために七種類の譬喩を説いて、七種類の思い上がった心を対治するのである。このことを知らなければならない。

また次に、[経は、小乗としては]煩悩はないが[大乗としては未だ煩悩の]汚れと思い上がりのある三種の人の、三昧や解脱や身体等についての汚れと思い上がりを対治するために、三種類の平等を説いている。このことを知るべきである。

1 勒那摩提訳には、「以」のかわりに「已」とある。
2 勒那摩提訳には、「次」の字を欠く。
3 勒那摩提訳には、「染性」の語を欠く。
4 勒那摩提訳には、「心」の字を欠く。
5 勒那摩提訳には、「此義」の語を欠く。
6 勒那摩提訳には、「復次為」を欠く。
7 勒那摩提訳には、「慢」の字を欠く。
8 勒那摩提訳には、「身」のかわりに「見」とある。
9 勒那摩提訳には、「種」の字を欠く。
10 勒那摩提訳には、「此義」の語を欠く。
11 吉蔵は「断小乗中諸煩悩尽。故名無煩悩人。而望大乗猶有煩悩。為大乗煩悩所染。故称為染。未得苦竟自苦竟。以此自高称之為慢」（『大正蔵』第四十巻、八一五頁下）と注釈している。

七種具足煩悩染性衆生

【テキスト】(p.8b,*ll.*1-4)　　【書き下し文】

(勒、p17b,*ll.*26-29)

何者七種具足煩悩染[12]性衆生。一者求勢力人。二者求声聞解脱人。三者[13]大乗人。四者有定人。五者無定人。六者集功徳人。七者不集功徳人。

何者か七種の煩悩染性具足の衆生なる。一には勢力を求むるの人、二には声聞の解脱を求むるの人、三には大乗の人、四には定あるの人、五には定なきの人、六には功徳を集むるの人、七には功徳を集めざるの人なり。

【現代語訳】

煩悩の汚れという性質をともなった七種の衆生とはいかなる者か。

一には勢力を求める人である。
二には声聞の解脱を求める人である。
三には大乗の人である。
四には禅定を修めている人である。
五には禅定を修めていない人である。
六には功徳を積む人である。
七には功徳を積まない人である。

12　勒那摩提訳には、「染」の字を欠く。
13　勒那摩提訳には、「者」の後に「求」とある。

七種増上慢心

【テキスト】(p.8b,*ll*.5-28)

(勒、p.17b,*l*.29-p.17c,*l*.16)

何等七種増上慢心。云何七種譬喩対治[14]。

【現代語訳】

七種の思い上がりの心とはどのようなものか。七種の譬喩によってどのように対治するのか。

【書き下し文】

何等か七種の増上慢心なる。如何が七種の譬喩もて対治するや。

14　勒那摩提訳では「何等七種増上慢心。云何七種譬喩対治」を「七種増上慢者」とする。

【テキスト】(p.8b,*ll*.5-28)

(勒、p.17b,*l*.29-p.17c,*l*.16)

一者顚倒求諸功徳増上慢心[15]。謂[16]世間中[17]諸煩悩染熾然増上[18]。而[19]求天人勝[20]妙境界有漏[21]果報。対治此故為[22]説火宅譬喩応知。

二者声聞[23]一向決定[24]増上慢心[25]。自言我乗与如来乗等[26]無差別。如是[27]倒取。対治此故為[28]説窮子譬

【書き下し文】

一には顚倒[29]して諸の功徳を求むる増上慢心なり。謂く、世間の中において諸の煩悩染の、熾燃に増上して、而も天人の勝妙なる境界の有漏の果報を求む。此れを対治するが故に為に火宅の譬喩[30]を説くこと、応に知るべし。

二には声聞の一向に決定せるの増上慢心なり。自ら我が乗と如来

喩応知。

三者大乗一向決定増上慢心[32]。起如是意[33]無別声聞辟支仏乗。如是[34]倒取。対治此故為説[35]雲雨譬喩応知。

四者実無謂[36]有増上慢心[37]。以有世間三昧三摩跋提。実無涅槃[38]生涅槃想。如是倒取[39]。対治此故為説[40]化城譬喩応知。

五者[41]散乱増上慢[42]心。実無有定。過去雖[43]有大乗善根而不覚知。不覚知故[44]不求大乗。狭劣心中生虚妄解。謂[45]第一乗。如是倒取[46]。対治此故為説繋宝珠譬喩応知。

六者実[47]有功徳増上慢心。聞[48]大乗法[49]取非大乗。如是倒取。対治此故為説輪王解自髻中明珠与之譬喩応知。

七者実[50]無功徳増上慢心[51]。於第一乗不曽修集諸善根。本聞[52]第一乗心中不取以[53]為第一。如是倒取[54]。対治此故為説医師譬喩応知。

の乗は等しく差別なしと言う。是くの如く倒じて取る。此れを対治するが故に為に窮子の譬喩[55]を説くこと、応に知るべし。

三には大乗の一向に決定せるの増上慢心なり。是くの如き意を起こす、声聞・辟支仏の乗と別なし、と。是くの如く倒じて取る。此れを対治するが故に為に雲雨の譬喩[56]を説くこと、応に知るべし。

四には実に無きを有りと謂うの増上慢心なり。世間の三昧と三摩跋提[57]有るを以て、実には涅槃無きに涅槃の想を生ず。是くの如く倒じて取る。此れを対治するが故に為に化城の譬喩[58]を説くこと、応に知るべし。

五には散乱の増上慢心なり。実に定有ること無く、過去に大乗の善根有りと雖も而も覚知せず。覚知せざるが故に大乗を求めず、狭劣の心の中に虚妄の解を生ず。謂く、第一乗なり、と。是くの如く倒じて取る[59]。此れを対治するが故に為に繋宝珠の譬喩[60]を説くこと、応に知るべし。

六には実に功徳有るの増上慢心なり。大乗の法を聞きて大乗にあらざるを取る[61]。是くの如く倒じて取る。此れを対治するが故に、為に輪王の自らの髻中の明珠を解いて与うるの譬喩[62]を説くこと、

応に知るべし。

七には実には功徳無き増上慢心なり。第一の乗において曽て諸の善根を修集せず、本より第一の乗を聞けども心中に取りて以て第一と為さざるなり。是くの如く倒じて取る。此れを対治するが故に為に医師の譬喩[78]を説くこと、応に知るべし。

【現代語訳】

一には倒錯して多くの功徳を求めるような思い上がりの心である。すなわち、世間における多くの煩悩がしきりに起きる中にありながら、天人のすぐれた境界での有漏の果報を求めるのである。これを対治するために［経は］火宅の譬喩を説くのである。［このことを］知るべきである。

二にはひたすら声聞というあり方が定まったものたちの思い上がりの心である。［彼らは］自分の乗り物と如来の乗り物は等しく違いのないものであると自ら言うのである。このように倒錯して執着する。これを対治するために［経は］窮子の譬喩を説くのである。［このことを］知らなければならない。

三にはひたすら大乗というあり方が定まったものたちの思い上がりの心である。［彼らは］次のような考えを持つ。すなわち、［我々の乗り物と］声聞や辟支仏の乗り物とは違いのないものである、と。このように倒錯して執着する。これを対治するために［経は］雲雨の譬喩を説くのである。［このことを］知るべきである。

四には実際には存在しないのに存在すると言う思い上がりの心である。世間的な三昧と等至を得たことによって、涅槃を得ていないのに涅槃を得たという想いを生ずることである。このように倒錯して執着する。これを対治するた

めに［経は］化城の譬喩を説くのである。［このことを］知るべきである。

五には散乱した心による思い上がりの心である。精神集中がなく、過去に大乗の善根を得ていたのに［それを］覚知しない。覚知しないから大乗を求めないのである。狭く劣った心の中で虚妄の理解を生じるのである。すなわち、［これが］第一の乗り物である、と。このように倒錯して執着する。これを対治するために［経は］繋宝珠の譬喩を説くのである。［このことを］知るべきである。

六には実際に功徳を積んだ者の思い上がりの心である。大乗の教えを聞いて大乗ではないものを取るのである。このように倒錯して執着する。これを対治するために［経は］、転輪王が自らの髻の輝く宝珠を解いて与える譬喩を説くのである。［このことを］知るべきである。

七には実際には功徳を積んでいない者の思い上がりの心である。これまで第一の乗り物を修行して、多くの善根の根本を修め集めたことがない。［それ故］第一の乗り物のことを聞いても、心にとどめて第一のものとしない。このように倒錯して執着する。これを対治するために［経は］、医師の譬喩を説くのである。［このことを］知らなければならない。

15 勒那摩提訳には、「一者」の語を欠く。
16 勒那摩提訳には、「心」の字を欠く。
17 勒那摩提訳には、「謂」のかわりに「以」とある。
18 勒那摩提訳には、「中」の字を欠く。
19 勒那摩提訳には、「染」の字を欠く。

20 勒那摩提訳には、「増上」の語を欠く。
21 勒那摩提訳には、「勝」の字を欠く。
22 勒那摩提訳には、「界有漏」を欠く。
23 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
24 勒那摩提訳には、「二者」の語を欠く。
25 勒那摩提訳では「聞」のあとに「人」の字がある。
26 勒那摩提訳には、「決定」の語を欠く。
27 勒那摩提訳には、「心」の字を欠く。
28 勒那摩提訳には、「自言」を欠く。
29 勒那摩提訳には、「等」の字を欠く。
30 勒那摩提訳では「是」の後に「顕」の字がある。
31 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
32 勒那摩提訳には、「三者」の語を欠く。
33 勒那摩提訳には、「決定」の語を欠く。
34 勒那摩提訳には、「心」の字を欠く。
35 勒那摩提訳には、「起如是意」の語を欠く。
36 勒那摩提訳には、「如是」のかわりに「顕」とある。
37 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
38 勒那摩提訳には、「雲」の字を欠く。
39 勒那摩提訳には、「四者」の語を欠く。
40 勒那摩提訳には、「謂」のかわりに「而」とある。
41 勒那摩提訳には、「心」のかわりに「人」とある。

42 勒那摩提訳には、「槃」のあとに「而」の字がある。
43 勒那摩提訳には、「如是倒取」を欠く。
44 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
45 勒那摩提訳には、「五者」の語を欠く。
46 勒那摩提訳には、「増上慢」の語を欠く。
47 勒那摩提訳には、「雖」の字を欠く。
48 勒那摩提訳には、「不覚知故」のかわりに「彼」とある。
49 勒那摩提訳には、「乗」のあとに「於」の字がある。
50 勒那摩提訳には、「謂」のかわりに「以為」とある。
51 勒那摩提訳には、「如是倒取」を欠く。
52 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
53 勒那摩提訳には、「六者実」を欠く。
54 勒那摩提訳には、「増上慢心」のかわりに「人」とある。
55 勒那摩提訳には、「聞」のかわりに「説」とある。
56 勒那摩提訳には、「法」の後に「而」の字がある。
57 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
58 勒那摩提訳には、「輪」の字を欠く。
59 勒那摩提訳には、「自」の字を欠く。
60 勒那摩提訳には、「七者実」を欠く。
61 勒那摩提訳には、「増上慢心」のかわりに「人」とある。
62 勒那摩提訳には、「曽修」を欠く。
63 勒那摩提訳には、「本聞」のかわりに「説」とある。

64 勒那摩提訳には、「心中」の語を欠く。
65 勒那摩提訳には、「以」の字を欠く。
66 勒那摩提訳には、「如是倒取」を欠く。
67 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
68 吉蔵は「三界實是苦境。而求常樂。故名顚倒」（『大正蔵』第四十巻、八一五頁下）と注釈している。
69 火宅の譬喩。『法華経』譬喩品で説かれる譬喩で、衆生がこの世で苦しんでいるのを、焼けつつある家の中にいることに喩えたもの。
70 窮子の譬喩。『法華経』信解品で説かれる譬喩。幼時に離ればなれになった長者の息子が、成長し困窮した時、長者はたまたま息子を見つけ、自分の邸宅に連れて来させようとしたが、息子は恐れて逃げ去った。そこで長者は志意下劣になっている息子のために策をめぐらし、彼を雇人とし、次第に上げ用いて、ついに自分の実子であることを明かし、一切の財産を与えた。長者を仏に、この息子を二乗の人に喩え、財産を大乗の教えに喩えている。
71 雲雨の譬喩。『法華経』薬草喩品に説かれる譬喩で、普通、薬草喩と言われる。同一味の慈雨によって小薬草・中薬草・上薬草・小樹・大樹がそれぞれ成長することを、修行者の側のあり方にあてはめて説いたもの。
72 三摩跋提　samāpatti の音写語。「等至」と意訳。身心が平等で安らかな状態になる瞑想。
73 化城の譬喩。『法華経』化城喩品に説かれる譬喩。五百由旬の悪道を目的地におもむく宝探しの隊商の指導者が、疲れて引き返そうとする隊員たちに対して、三百由旬の途中に幻の城を化作し、そこで休ませて疲れをいやし、ついにその後、真の目的地へ向かって行くという喩え。二乗のさとりは、大乗の『法華経』のさとりに至るための方便であることを比喩的に言い表したもの。
74 吉蔵は「如是倒取者。乘非第一。謂爲第一。故名倒取。又實有大乘而不求大乘。實無小乘而求小乘」（『大正蔵』第四十巻、八一六頁上）と注釈している。
75 繋宝珠の譬喩。『法華経』五百弟子受記品に説かれる譬喩。親友の家で酔いつぶれた男の着衣の裏に、この親友が宝珠を結んでおいてくれたのに、それに気づかず貧窮する男の話である。男は声聞・縁覚の二乗に、親友は釈尊に、宝珠は一仏乗に喩えられる。
76 吉蔵は「此人本學大乘。但作有所得學。故聞説大乘退大取小果。」（『大正蔵』第四十巻、八一六頁中）と注釈している。
77 輪王が自らの髻中の明珠を解いて与うるの譬喩。『法華経』安楽行品に説かれる譬喩で、『法華経』を転輪聖王の髻の中の宝珠に喩え

る。

78 医師の譬喩。『法華経』寿量品に説かれる譬喩で、毒を飲んで苦しむ子に薬を飲ませるための方便として、自分は死んだと告げさせ、悲しみのあまり正気にかえった子どもたちが薬を飲んで助かるという喩え話。仏の入滅を父である医師の死に喩えている。

七種対治

【テキスト】(p.8b,*l*.29-p.8c,*l*.10)

(勒、p.17c,*l*.16-p.18a,*l*.10)

第一人者。示[79]世間中種種善根三昧功徳方便令喜[81]。然後令入大[82]涅槃故。

第二人者。以三為一令入大乗故。

第三人者。令知種種乗。諸仏如来平等説法。随諸[83]衆生善根種子而[84]生芽故。

第四人者。方便令入涅槃城故。涅槃城者。所謂[85]諸禅三昧城故。過彼城已。然[86]後令入大涅槃城故。

第五人者。示[87]其過去所有善根。令憶念已[89]。然後[90]教令[91]入三昧故。

第六人者。説大乗法。以此法門同十地行満。

【書き下し文】

第一の人は、世間中の種種の善根と三昧の功徳を示して、方便もて喜ばしめ、然る後に大涅槃に入らしむるが故なり。

第二の人は、三を以て一と為し、大乗に入らしむるが故なり。

第三の人は、種種の乗を知らしむ。諸仏・如来は平等に説法したもうも、諸の衆生の善根の種子に随いて芽を生ずるが故なり。

第四の人は、方便もて涅槃の城に入らしむるが故なり。涅槃の城とは、謂う所は諸の禅・三昧の城なるが故なり。彼の城を過ぎ已りて、然る後に大涅槃の城に入らしむるが故なり。

第五の人は、其の過去の所有の善根を示して憶念せしめ已りて、然る後に三昧に入らしむるが[94]故なり。

第六の人は、大乗の法を説き[95]、此の法門は十地の行の満つるに同

諸仏如来密与授記故。

第七人者。根未淳熟為令熟故。如是示現得[93]涅槃量。為是義故。如来説七種譬喩。

ずるを以て、[96]諸仏・如来は密かに授記を与えるが[97]故なり。

第七の人は、根の未だ淳熟せざれば、熟せしめんが為の故に[98]、是くの如く涅槃の量を得るを示現す[99]。是の義の為の故に如来は七種の譬喩を説きたまう。

【現代語訳】

第一の人（求勢力人）のために、世間的な種々の善根と三昧の功徳を示して、方便によって［彼を］喜ばせ、その後に大いなる涅槃に入らせるからである。

第二の人（求声聞解脱人）のために、三つの［乗り物］を一つの［乗り物］となして［彼を］大乗に入らせるからである。

第三の人（大乗人）のためには、種々の乗り物のことを知らしめるのである。諸々の仏・如来は平等に説法されるが、諸々の衆生の善根の種子に従って芽が生じるからである。

第四の人（有定人）のために、方便によって涅槃の城に入らせるからである。涅槃の城とはすなわち、諸々の禅定と三昧の城である。その城を過ぎてから、その後で大涅槃の城に入らせるからである。

第五の人（無定人）のために、その人が過去に得ていたあらゆる善根を示して［それを］思い出させて、その後で［それを］教えて三昧に入らせるからである。

第六の人（集功徳人）のために、大乗の教えを説いて、この法門（『法華経』）が［菩薩の］十の修行の段階を満たしているのと同じであることによって、諸々の仏・如来は密かに授記を与えるからである。

第七の人（不集功徳人）のために、未だ機根が熟していないので［機根を］熟させるためにこのように涅槃の量を示すのである。以上の意義のために、如来は七種の譬喩を説かれるのである。

79 勒那摩提訳には、「示」のかわりに「以」とある。
80 勒那摩提訳には、「中」の字を欠く。
81 勒那摩提訳には、「喜」のかわりに「戯」とある。
82 勒那摩提訳には、「大」の字を欠く。
83 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
84 勒那摩提訳には、「而」の字を欠く。
85 勒那摩提訳には、「所謂」の語を欠く。
86 勒那摩提訳には、「然後」を欠く。
87 勒那摩提訳には、「其」の字を欠く。
88 勒那摩提訳には、「所有」の語を欠く。
89 勒那摩提訳には、「已」の字を欠く。
90 勒那摩提訳には、「然後」を欠く。
91 勒那摩提訳には、「令」の字を欠く。なお「教」も「令」と同じ使役の助字。
92 勒那摩提訳には、「如是」の語を欠く。
93 勒那摩提訳には、「得」の字を欠く。
94 吉蔵は「令其憶念曽発菩提心。已然後令得三昧常憶菩提心不忘也」（『大正蔵』第四十巻、八一七頁上）と注釈している。
95 吉蔵は「説大乗法者。即是賜其頂髻明珠」（『大正蔵』第四十巻、八一七頁上）と注釈する。
96 吉蔵は「以此法門同十地行満者。此法門即是一乗法門。一乗法門明十地行究竟圓満。故得成佛。問。此釋何義。答。釋頂上明珠最爲尊極。一乗經同十地行満亦是尊極。」（『大正蔵』第四十巻、八一七頁上）と注釈する。

97 吉蔵は「諸佛如來密與授記故者。以賜其珠密欲令其成轉輪王也。爲説法華即是密與授記令其成佛也」（『大正蔵』第四十巻、八一七頁上）と注釈する。

98 吉蔵は「根未熟令熟故者。即是狂子未敢服藥。欲令其服也。」（『大正蔵』第四十巻、八一七頁上）

99 吉蔵は「示現涅槃量。如父欲令服藥故現死。佛今亦爾。欲令衆生了悟示現涅槃」（『大正蔵』第四十巻、八一七頁上）と注釈する。

三種平等

三種無煩悩人三種染慢

【テキスト】（p.8c,*ll*.11-14）

（勒、p.18a,*ll*.10-13）

何者三種無煩悩人三種[1]染慢。所謂三種[2]顚倒信故。何等為[3]三。一者信種種乗異。二者信世間涅槃異。三者信彼此身異。為対治此三種染慢故。[4]説三種平等応知。

【書き下し文】

何者か三種の無煩悩の人の三種の染慢なる。[5]いわゆる三種の顚倒の信なるが故なり。何等をか三と為す。一には種種の乗の異を信ず。二には世間と涅槃の異を信ず。三には彼此の身の異を信ず。此の三種の染慢を対治せんが為の故に三種の平等を説く。応に知るべし。

【現代語訳】

三種の無煩悩の人の三種の汚れた思い上がりとは何か。それはすなわち、三種の倒錯した信である。三種とはどのようなものなのか。

一には種々の［教えの］乗り物が異なっていると信じることである。

二には世間と涅槃が異なっていると信じることである。
三には自身と他身などの身体が異なっていると信じることである。
これら三種の汚れた思い上がりを対治するために、[仏は]三種の平等を説くのである。[このことを]知らなければならない。

1 勒那摩提訳には、「三種」の語を欠く。
2 勒那摩提訳には、「所謂三種」を欠く。
3 勒那摩提訳には、「何等三種」を欠く。
4 勒那摩提訳には、「慢故」を欠く。
5 上記（八頁上、二八行目）を参照。

三種平等・対治

【テキスト】(p.8c,*ll*.15-20)

(勒、p.8a,*ll*.13-17)

何者名為三種平等。云何対治[6]。一者乗平等。謂与声聞授菩提記[7][8]。唯一[9]大乗無二乗故。是乗平等無差別故[10]。二者世間涅槃平等。以多宝如来入於涅槃[11]。世間涅槃彼此平等無差別[12]故[13]。三

【書き下し文】

何者か名づけて三種の平等と為す。如何が対治するや。
一には乗の平等なり。謂く、声聞に与えて菩提の記を授くるなり。唯だ一大乗のみにして二乗なきが故なり。是の乗は平等にして無差別なるが故なり。

者身平等。多宝如来已入涅槃。復示現身自身他身法身平等無差別故。

二には世間と涅槃の平等なり。多宝如来の涅槃に入るを以て、世間と涅槃は彼此平等にして差別なきが故なり。三には身の平等なり。多宝如来は涅槃に入りおわりて、復た身を示現す。自身と他身と法身とは平等にして差別なきが故なり。

【現代語訳】

三種の平等とはどのようなものを名づけているのか。どのように［三種の汚れた思い上がりを］対治するのか。

一には［教えの］乗り物の平等である。すなわち、声聞に菩薩の記を授けるということである。なぜならば、唯だ一つの大きな乗り物だけがあるのであって、［その他に］二つの乗り物（声聞乗と辟支仏乗）があるのではないからである。これらの乗り物は平等であって、差別のないものだからである。

二には世間と涅槃の平等である。多宝如来が涅槃に入るが故に、世間と涅槃は平等であって差別のないものだからである。

三には身体の平等である。多宝如来は涅槃に入られてから、また［自らの］身体を示すということである。なぜならば、自身と他身と法身とは平等であって差別のないものだからである。

6　勒那摩提訳には、「何者名為三種平等。云何対治」を欠く。
7　勒那摩提訳には、「謂」の字を欠く。
8　勒那摩提訳には、「菩提」の語を欠く。
9　勒那摩提訳には、「一」のかわりに「有」とある。

10 勒那摩提訳には、「是乗平等無差別故」を欠く。
11 勒那摩提訳には、「於」の字を欠く。
12 勒那摩提訳には、「彼此」を欠く。
13 勒那摩提訳には、「無差別」の語を欠く。

授記所由

【テキスト】(p.8c,*ll*.20-24)

(勒、p.18a,*ll*.17-20)

如[14]是三種[15]無煩悩人染慢之心[16]見彼此身所作差別[17]。不知彼此仏性法身悉[18]平等故。謂[19]即此[20]人我証此法故[21]。彼人不得。此対治故[22]。与諸声聞授記応知。

【書き下し文】

是くの如き三種の無煩悩の人の染慢の心は、彼此の身の所作の差別を見て、彼此の仏性・法身の悉く平等なることを知らざるが故なり。謂く、即ち此の人は、我は此の法を証するが故なり、彼の人は得ざるなりと。此の対治の故に諸の声聞の授記を与う。応に知るべし。

【現代語訳】

このような、汚れある思い上がった心を持つ三種の無煩悩の人は、かの身体とこの身体のなりたちの違いを見て、かれとこれの仏性と法身がすべて平等であることを知らないのである。つまりこの人は、私はこの教えをさとったが、かの人は得ていないとするのである。これを対治するために、多くの声聞たちに授記を与えるのである。[このことを]知らなければならない。

14 勒那摩提訳には、「如」の字を欠く。
15 勒那摩提訳には、「三種」の語を欠く。
16 勒那摩提訳には、「之心」を欠く。
17 勒那摩提訳には、「差別」の語の後に「以」の字がある。
18 勒那摩提訳には、「悉」の字を欠く。
19 勒那摩提訳には、「謂」の字を欠く。
20 勒那摩提訳には、「此」のかわりに「彼」とある。
21 勒那摩提訳には、「故」の字を欠く。
22 勒那摩提訳では「此対治」を「対治此」とする。

声聞菩薩得記不同

【テキスト】(p.8c,*l*.25-p9a,*l*.3)

(勒、p.18a,*ll*.20-27)

問曰。彼声聞等。為実成仏故与授記。為不成仏与授記耶[24]。若実成仏[25]。菩薩何故於無量劫修集無量種種[26]功徳。若不成仏云何与之[27]虚妄授記。答曰。彼声聞等得[29]授記者。得決定心非謂声聞[30]。成就法性如来[31]。依[32]彼三種[33]平等説一乗法。以仏[34]法身[35]声聞法身平等[36]無異故与授記。非即具足修

【書き下し文】

問うて曰く、彼の声聞等は実に成仏するが故に授記を与えんとやせん、成仏せざるに授記を与えんとやせん。若し実に成仏せば、菩薩は何故に無量の劫に於いて無量の種種の功徳を修集する。若し成仏せざれば、云何が之の虚妄の授記を与うるや。

答えて曰く、彼の声聞等、授記を得るとは、決定心を得るなり。声聞の、法性を成就することを謂うにあらず。如来は彼の三種の

行功徳[37]。是故菩薩功徳具足。諸声聞人功徳[38]未足[39]。

平等に依りて一乗の法を説く。仏の法身と声聞の法身、平等にして異なり無きを以ての故に授記を与うなり。即ち修行の功徳を具足するにあらず。是の故に菩薩は功徳具足し、諸の声聞の人は功徳未だ足らざるなり。

【現代語訳】

問う、その声聞たちは本当に仏となるから授記を与えるのか、それとも、仏とはならないけれども授記を与えるのか。もし本当に仏となるならば、菩薩はどうして量り知れないほどの劫にわたって量り知れないほどの様々な功徳を修め集めるのか。もしも仏とならないならば、どうしてそのような虚妄の授記を与えるのか。

答える、その声聞たちが授記を得るというのは、決定心を得るということである。声聞が法性を成就することをいうのではない。如来は、上述の三種の平等に依拠して一つの乗り物の教えを説く。仏の法身と声聞の法身とは等しいものであって異なっていないから[声聞に]授記を与えるのである。[声聞たちは]修行の功徳を具えているわけではないのである。それ故に、菩薩は功徳を具え、声聞の人たちは功徳を具えていないのである。

23 勒那摩提訳には、「問曰」を欠く。
24 勒那摩提訳では「耶」を「也」とする。
25 勒那摩提訳には、「仏」の後に「者」とある。
26 勒那摩提訳には、「種種」の語を欠く。
27 勒那摩提訳には、「与之」を欠く。

28 勒那摩提訳には、「答曰」を欠く。
29 勒那摩提訳には、「等得」を欠く。
30 勒那摩提訳には、「謂声聞」を欠く。
31 勒那摩提訳には、「如来」のかわりに「故」とある。
32 勒那摩提訳には、「依」の字の前に「如来」の語がある。
33 勒那摩提訳には、「彼」と「種」の字を欠く。
34 勒那摩提訳には、「仏」の字のかわりに「如来」の語がある。
35 勒那摩提訳には、「法身」の語の後に「与彼」とある。
36 勒那摩提訳には、「平等」の語を欠く。
37 勒那摩提訳には、「功徳」の語の後に「故」とある。
38 勒那摩提訳には、「徳」の字を欠く。
39 勒那摩提訳では「足」を「具足」とする。

受記不同

【テキスト】(p.9a,*ll.*4-14)

(勒、p.18a,*l.*27-p.18b,*l.*8)

言授記者[40]六処示現。五是仏記[41]一菩薩記[42]。如来記者。謂[43]舎利弗大[44]迦葉等衆所知識[45]。名号不同故別与[46]記。富楼那等五百人千二百[47]等同一名故。倶時与記。学無学等皆[48]同一号。又復[49]非是[50]衆所

【書き下し文】

授記と言うは六処に示現す。五は是れ仏の記なり。一は菩薩の記なり。

如来の記とは、謂く、舎利弗・大迦葉等の衆に知識せらるる所なり。名号同じからざるが故に別に記を与う。[65]富楼那等の五百人、

知識故同与記[51]。如来与彼提婆達多授別記[52][53]者。示現如来無怨悪[54]故。与比丘尼及諸天女授仏[55]記者。示現女人在家出家修菩薩行[56]皆証仏果故与授記[57]。菩薩記者。如下不軽菩薩品中示現応知[58]。礼拝讃歎作如是言[59]。我不軽汝。汝等皆当得作仏者[60]。示現衆生皆有仏性故。

千二百等は同じく一名なるが故に倶時に記を与う[61]。学・無学等は皆な同じく一号なり。又復た是れは衆に知識せられたるにあらざるが故に同じく記を与う[62]。如来は彼の提婆達多に与うるに別の記を授くとは、如来の怨悪なきを示現するが故なり[63]。比丘尼及び諸の天女に与うるに仏の記を授くとは、女人・在家・出家は菩薩行を修して皆な仏果を証することを示現するが故に授記を与う[64]。菩薩の記とは、下の不軽菩薩品中に示現するが如し。応に知るべし。

「礼拝讃歎して是くの如き言を作す。我は汝を軽んぜず。汝らは皆な当に作仏すべし」[65]とは、衆生は皆な仏性を有することを示現するが故なり。

【現代語訳】

授記というのは六つの処において示されている。[そのうちの]五つは仏による記別（成仏の予言）である。一つは菩薩による記別である。

如来による記別というのは、すなわち、（一）人々によく知られた舎利弗や大迦葉など[に対する記別]である。名号が同じではないので、個別に記別を与えているのである。（二）富楼那などの五百人や千二百人は[富楼那という]一つの名で代表せしめているから、同時に記別を与えているのである。（三）学・無学の者はみな同じく[学・無学と

いう」名号である。また、彼らは人々によく知られた者ではないので同時に記を与えているのである。(四)如来がかの提婆達多に個別に記別を授けるのは、如来には怨悪がないことを示すためである。(五)比丘尼や天女たちに仏が授記するのは、女性をはじめ、在家の人、出家の人、誰であれ菩薩行を修行すれば、みな仏果を得ることができるということを示すために授記を与えるのである。

菩薩による記別というのは、後の不軽菩薩品の中で示されているごとくである。「このことを」知らなければならない。「礼拝讃歎して、次のように言った。『私はあなたを軽んじません。あなたたちはみな仏となるでしょうから』」というのは、衆生はみな仏性を有しているということを示しているのである。

40 勒那摩提訳には、「者」の後に「有」の字を加える。
41 勒那摩提訳では「五是仏記」を「五者如来記」とする。
42 勒那摩提訳には、「一」の後に「者」の字を加える。
43 勒那摩提訳には、「謂」の字を欠く。
44 勒那摩提訳では「大」のかわりに「摩訶」の語がある。
45 勒那摩提訳では「知識」の語の後に「故」の字がある。
46 勒那摩提訳では「別与」を「与別」とする。
47 勒那摩提訳では「百」の後に「人」の字がある。
48 勒那摩提訳では「皆」のかわりに「倶」の字がある。
49 勒那摩提訳には、「又復」を欠く。
50 勒那摩提訳では「是」の字を欠く。

51 勒那摩提訳では「同」のかわりに「一時」の語がある。
52 勒那摩提訳には、「如来」の語を欠く。
53 勒那摩提訳には、「彼」の字を欠く。
54 勒那摩提訳には、「授別」を欠く。
55 勒那摩提訳には、「悪」の字を欠く。
56 勒那摩提訳には、「授仏」を欠く。
57 勒那摩提訳では「行」の後に「者」の字を加える。
58 勒那摩提訳には、「与授記」を欠く。
59 勒那摩提訳では「記」を「授記」とする。
60 勒那摩提訳には、「下」の字を欠く。
61 勒那摩提訳には、「応知」を欠く。
62 勒那摩提訳には、「作如是」を欠く。
63 勒那摩提訳には、「得」の字を欠く。
64 勒那摩提訳では「現」のかわりに「諸」の字がある。
65 如来記の一つ目。舎利弗の授記は譬喩品に、大迦葉の授記は授記品において説かれている。授記品では須菩提、大迦旃延、大目犍連の授記も説かれている。
66 如来記の二つ目。富楼那の授記は五百弟子授記品において説かれている。
67 如来記の三つめ。学無学の二千人の授記は授学無学人記品において説かれている。そこでは、阿難、羅睺羅の授記も説かれている。
68 如来記の四つめ。提婆達多の授記は提婆達多品において説かれている。
69 如来記の五つ目。比丘尼の授記は勧持品において説かれているが、天女の授記は説かれていない。
70 『妙法華』常不軽菩薩品中にほぼ同じ一節がある。「亦復故往禮拜讃歎而作是言。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。」(『大正蔵』第九巻五十頁下二二行目～二三行目)

声聞得記不得記

【テキスト】(p.9a,*ll.*15-20)

(勒、p.18b,*ll.*8-14)

言声聞人得授記[71]者。声聞有四種。一者決定声聞。二者増上慢声聞。三者退菩提心声聞。四者応化声聞。二種声聞如来授記[72]。謂応化者[73]。退已還発菩提心者。若決定者[74]増上慢者[75]二種声聞[76]。根未熟故[77]不与授記。菩薩与授記者[78]。方便[79]令発菩提[80]心故。

【書き下し文】

声聞の人の授記を得ると言うは、声聞に四種あり。一には決定せる声聞。二には増上慢の声聞。三には菩提心より退する声聞。四には応化の声聞なり。二種の声聞には如来は記を授けたまう。謂く応化の者と退しおわりて還た菩提心を発す者なり。決定せる者と増上慢の者との二種の声聞の若きは根熟せざるが故に授記を与えず。菩薩が授記を与うとは、方便もて菩提心を発せしむるが故なり。[81]

【現代語訳】

声聞の人が授記を得ると言うが、声聞には四種ある。一には［小乗に］定まっている声聞、二には思い上がった声聞、三には菩提心から退く声聞、四には菩薩が応現化作した声聞である。

［このうち］二種の声聞には如来は記別を授ける。すなわち、応現化作した者と、菩提心から退いたが、再び菩提心を発した者とである。［小乗に］定まっている者と思い上がった者との二種の声聞は、機根が熟していないので授記を与えないのである。

［不軽］菩薩が［機根の熟未熟に関係なく誰にでも］授記を与えたというのは、方便によって［授記を与えた相手に］菩提心を発させるためである。

71 勒那摩提訳には、「人得」を欠く。
72 勒那摩提訳には、「如来」の語の後に「与」の字がある。
73 勒那摩提訳には、「者」の字のかわりに「声聞」とある。
74 勒那摩提訳には、「若」の字を欠く。
75 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
76 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
77 勒那摩提訳には、「故」の字の後に「如来」の語がある。
78 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
79 勒那摩提訳には、「方便」の語の前に「菩薩授記者」とある。
80 勒那摩提訳には、「菩提」の語を欠く。
81 吉蔵は次のように注釈している。「疑者云。若増上慢聲聞佛不與受記者。不輕菩薩何故通二人與之受記。釋云。佛就根熟未熟。故與記不與記。菩薩約二種義故。所以與記。一者如前明有佛性故得與授記。二者方便令發菩提心故與提記也。」（『大正蔵』第四十巻、八一九頁上）すなわち、如来は相手の機根を見て授記を与えたり与えなかったりするが、菩薩は相手の機根に関係なく、菩提心を発させるために方便として授記を与える、ということである。なお、吉蔵の四種声聞に対する考え方について近年の議論がある。たとえば、末光愛正「吉蔵の成仏不成仏観（二）」（『駒澤大学仏教学部論集』第十八号、一九八八年）や奥野光賢「吉蔵の『法華論』の依用をめぐって――特に四種声聞授記を中心に――」（同前書）などを参照。

三乗一乗

【テキスト】(p.9a,*ll*.21–25)

(勒、p.18b,*ll*.15–18)

又依何義。仏[83]説三乗名為一乗。依同義故。授[84]諸声聞大菩提記。言同義者。以仏[87]法身声聞法身彼此[88]平等無差別故。以諸[89]声聞辟支仏等[90]乗不同[91]故有差別。以彼二乗[92]非大乗故。

【書き下し文】

又、何の義に依りて仏は三乗を説いて名づけて一乗と為すや。同義に依るが故に諸の声聞に大菩提の記を授く。同義と言うは、仏の法身と声聞の法身は彼此平等にして差別なきを以ての故なり。諸の声聞・辟支仏等の乗は同じからざるを以ての故に差別あり。彼の二乗は大乗にあらざるを以ての故なり。

【現代語訳】

また、どのような意義から仏は三つの［教えの］乗り物を説いて［それらを］一つの乗り物とするのだろうか。同じという意義に依拠して、声聞たちに大菩提の記を授けるのである。

同じというのは、仏の法身と声聞の法身とは平等なるものであって差別のないことをいうのである。声聞や辟支仏等たちの乗り物は同じではないから差別がある。彼らの乗り物は大きな乗り物ではないからである。

82 勒那摩提訳には、「義」の後に「故」の字がある。
83 勒那摩提訳には、「仏」のかわりに「如来」とある。
84 勒那摩提訳には、「授」のかわりに「与」の字がある。

85 勒那摩提訳には、「大菩」のかわりに「授」とある。
86 勒那摩提訳には、「言」の字を欠く。
87 勒那摩提訳には、「仏」のかわりに「如来」とある。
88 勒那摩提訳には、「彼此」を欠く。
89 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
90 勒那摩提訳には、「等」のかわりに「異」とある。
91 勒那摩提訳には、「不同」の語を欠く。
92 勒那摩提訳には、「二乗」の語を欠く。

十無上

無上の義

【テキスト】(p.9a,*l*.25-p.9b,*l*.1)

(勒, p.18b,*ll*.18-22)

如来説言不離我身是無上義。一切声聞辟支仏等二乗[1]法中不説此義。以其[2]不能如実[3]解故。以[4]是義故[5]。諸菩薩等[6]行菩薩行非為虚妄。無上義者[7]。自余経文[8]明無上義。無上義者[9]。略有十種[10]此義応知[11]。何等為十[12]。

【書き下し文】

如来説いて言わく「我が身を離れざること、是れ無上の義なり[13]」と。一切の声聞・辟支仏等の二乗の法中には此の義を説かず。其の能く如実に解せざるを以ての故なり。是の義を以ての故に、諸の菩薩等の、菩薩の行を行ずるは虚妄ならざるなり[14]。

無上の義とは、自余の経文、無上の義を明かす。無上の義とは略して十種あり。此の義応に知るべし。何等をか十と為すや。

【現代語訳】

如来は「我が［法］身を離れないこと、これが無上の意義である」と言われている。すべての声聞や辟支仏等たちの二つの乗り物の教えの中にはこの［無上の］意義が説かれていない。彼らは［この無上の意義を］如実に理解しないからである。この意義の故に、菩薩たちが菩薩の行を行うのは虚妄ではないのである。

無上の意義とは、その他の経文が無上の意義を明らかにしている。無上の意義とはおおよそ十種ある。この意義を知るべきである。十とはどのようなものか。

1 勒那摩提訳には、「等二乗」を欠く。
2 勒那摩提訳には、「其」の字を欠く。
3 勒那摩提訳には、「如実」の語を欠く。
4 勒那摩提訳には、「以」の字を欠く。
5 勒那摩提訳には、「義」の字を欠く。
6 勒那摩提訳には、「等」の字を欠く。
7 勒那摩提訳には、「自」の字を欠く。
8 勒那摩提訳には、「経文」の語のかわりに「残修多羅」とある。
9 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
10 勒那摩提訳には、「略」の字を欠く。
11 勒那摩提訳には、「此義」の語を欠く。
12 勒那摩提訳には、「何等為十」を欠く。
13 吉蔵は「如來説言不離我身是無上義者。佛於一切人中最爲無上。故判無上唯在於佛。而言不離我身者。謂不離法身最是無上。」（『大正

蔵』第四十巻、八一九頁中）としている。

14 吉蔵はこれは『摂大乗論』の十種勝相や無等聖教と同じであるとしている。（『大正蔵』第四十巻、八一九頁中）

一 無上～七無上

【テキスト】（p.9b,*ll*.1-10）

（勒、p.18b,*l*.25-p.18c,*l*.2）

一者示現種子無上故説雨譬喩。汝等所行是菩薩道者。謂発菩提心退已還発者。前所修行善根不滅同後得果故。

二者示現行無上故説大通智勝如来本事等[15]。

三者示現増長力無上故説商主譬喩。

四者示現令解無上故説繋宝珠譬喩。

五者示現清浄国土無上故示現多宝如来塔。

六者示現説無上故説解髻中明珠譬喩。

七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等[17]。

【書き下し文】

一には種子の無上を示現するが故に、雨の譬喩を説く。「汝らが所行は是れ菩薩道なり」[18]とは、謂く、菩提心を発して退きおわりて還た発する者[19]は、前に修行する所の善根不滅にして同じく後に果を得るが故なり。

二には行の無上[20]を示現するが故に、大通智勝如来[21]の本事等を説く。

三には増長力の無上[22]を示現するが故に、商主の譬喩[23]を説く。

四には令解の無上[24]を示現するが故に、繋宝珠の譬喩を説く。

五には清浄国土の無上[25]を示現するが故に、多宝如来塔[26]を示現す。

六には説の無上[27]を示現するが故に、解髻中明珠の譬喩を説く。

七には教化衆生の無上[28]を示現するが故に、地中より無量の菩薩摩訶薩等を踊出す。

【現代語訳】

第一には種子の無上を示すために、［薬草喩品の中で］雨の譬喩を説くのである。「お前たちの所行は菩薩道である」というのは、かつて菩提心を発しながらもそこから退転したが再び［菩提心を］発した者は、前の修行によって積まれた善根は不滅であって、それがそのまま後に果報をもたらすからである。

第二には［修］行の無上を示すために、過去世における大通智勝如来の行いなどを説くのである。

第三には増長する力の無上を示すために、［化城喩品の中で］指導者の譬喩を説くのである。

第四には理解させることの無上を示すために、［五百弟子授記品の中で］繋宝珠の譬喩を説くのである。

第五には清浄なる国土の無上を示すために、［見宝塔品の中で］多宝如来塔を示すのである。

第六には説くことの無上を示すために、［安楽行品の中で、転輪聖王が］髻中の輝く宝珠を解いて与えるという譬喩を説くのである。

第七には衆生を教化することの無上を示すために、［従地踊出品の中で］地中より量り知れないほど多くの菩薩摩訶薩などが踊出した［と説くのである］。

15 勒那摩提訳には、「等」の字の後に「故」とある。
16 勒那摩提訳には、「解」の字を欠く。
17 勒那摩提訳には、「等」の字の後に「故」とある。
18 『妙法華』薬草喩品（『大正蔵』第九巻、二十頁中二三行目）にそのままの形で存する。「今爲汝等。説最實事。諸聲聞衆。皆非滅度。

汝等所行。是菩薩道。漸漸修學。悉當成佛」

19 吉蔵は「謂發菩提心退已還發者。叙聲聞人有三時。一過去本發菩提心時。二者中間退菩提心時。三者聞法華經還發菩提心時。今即取前後菩提心爲種無上。故取此文而釋之也。」（『大正蔵』第四十巻、八一九頁下）と注釈している。

20 吉蔵は「以初發菩提心。次令修菩薩行。菩薩行比四乗行最爲無上。故言行無上也」（『大正蔵』第四十巻、八一九頁下）としている。

21 『妙法華』化城喩品に説かれる三千塵点劫の昔に出現したとされる仏のこと。

22 吉蔵は「以行菩薩行故菩薩行便増長。故言増長力無上」（『大正蔵』第四十巻、八一九頁下）と注釈する。

23 『妙法華』化城喩品に説かれる化城の譬喩のこと。吉蔵も「商主即是化城品導師也。」（『大正蔵』第四十巻、八一九頁下）と注釈している。

24 吉蔵は「親友示衣内之殊。衣内之珠即菩提心。解菩提心是悟解中無上之解。故名解無上。問。何故云令解無上。答。過去十六沙彌説法華經。令三根人得無上解故發菩提心。故云令解無上」（『大正蔵』第四十巻、八一九頁下～八二〇頁上）と注釈している。

25 吉蔵は「如塔品一一方四百萬億那由他土。合爲一土。即一切土中最勝爲淨土無上也」（『大正蔵』第四十巻、八二〇頁上）と注釈している。

26 『妙法華』見宝塔品において、忽然として地中から出現したと説かれる七宝塔である。

27 吉蔵は「次示現説無上者。讓頂珠賜之。即是爲説平等大慧。謂一切説中最勝爲説無上。既有淨土便有教門故。次辨説無上也」（『大正蔵』第四十巻、八二〇頁中）と注釈している。

28 吉蔵は「既有教門便有眷屬故。次明教化衆生無上。以化得千世界塵數菩薩。三十二相皆已具足。數多徳積一切所化衆生中最勝。謂衆生無上。即眷屬果也」（『大正蔵』第四十巻、八二〇頁中）と注釈している。

八無上

【テキスト】（p.9b,*ll*.10-16）　　**【書き下し文】**

（勒、p.18c,*ll*.2-8）

八者示現成大菩提無上故。[29]示現[30]三種仏菩提故。　　八には大菩提を成ずるの無上を示現するが故に、三種の仏の菩提

一者示現応仏菩提[31]。随所応見而為示現[32]。如経皆謂如来出釈氏宮去伽耶城不遠坐於道場得成[33]阿耨多羅三藐三菩提故。二者示現報仏菩提。十地行満足得常涅槃証故。如経善男子我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫故。

を示現するが故なり。

一には応仏の菩提を示現す。随所に応見して而して為に示現す。経の如く[35]「皆な如来は釈氏の宮を出て伽耶城を去ること遠からず、道場に於いて坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得たりと謂う」が故なり。

二には報仏の菩提を示現す。十地の行満足して常涅槃の証を得るが故なり。経の如く[36]「善男子よ、我は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由多劫」なるが故なり。

【現代語訳】

第八には大菩提を成就することの無上を示すために、三種の仏の菩提を示すのである。

一には応身仏の菩提を示す。[仏は]随所に応現して[自らを]示現するのである。経に「[あらゆる世間の天の神々と人間たち、及び阿修羅たちは]一様に如来が、釈迦族の宮殿を出て[出家し]、伽耶の都城からほど遠くない、さとりの座に坐して、無上の正しいさとりを獲得したと思っている」とあるように。

二には報身仏の菩提を示す。十地の行を満足して常住なる涅槃を体得するからである。経に「善男子たちよ、私が仏となってからこのかた、実は無量無辺の百千万億那由他劫という無限の長時が経っているのだ」とあるように。

29　勒那摩提訳には、「故」の字のかわりに「者」とある。

30 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
31 勒那摩提訳では「応」の字の後に「化」の字がある。
32 勒那摩提訳では「示現」の後に「故」の字がある
33 勒那摩提訳には、「成」の字を欠く。
34 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
35 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁中、九～十一行目）の中にほぼ同じ文句が存在する。『妙法華』では「皆謂如来」は「皆謂今釈迦牟尼仏」とある。
36 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁中、十二～十三行目）にそのままの形で存する。

【テキスト】(p.9b,*ll*.17-27)

(勒、p.18c,*l*.8-p.19a,*l*.2)

三者示現[37]法仏菩提。謂如来蔵性浄涅槃常恒清涼不変等義。[38]如経如来如実知見三界之相次第[39]乃至不如三界見於三界故。三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如来蔵故。無有生死若退若出者。謂常恒清涼不変義[40]故。亦無在世及滅度者。謂如来蔵真如之体。不即衆生界。不離衆生界故。非実非虚非如非異者。謂離四種相。[41]有四種相者。是無常故。不如三界見於[42]

【書き下し文】

三には法仏の菩提を示現す。如来蔵の性浄、涅槃の常恒・清涼・不変等の義を謂う。経の如く[44]「如来は如実に三界の相を知見し」次第して乃至「三界の三界を見るが如くならざる」が故なり。

「三界の相」とは衆生界は即涅槃界なるを謂う。衆生界を離れずして如来蔵あるが故なり。

「生死、若しは退、若しは出あることなし」[45]とは、常恒清涼不変の義を謂うが故なり。

「亦た、在世及び滅度の者なし」[46]とは、如来蔵真如の体は、衆生

三界者。謂仏[43]如来能見能証真如法身。凡夫不見故。是故経言如来明見無有錯謬故。

界に即せず衆生界を離れざることを謂うが故なり。「実にあらず虚にあらず如にあらず異にあらず」[47]とは、四種の相を離るることを謂う。四種の相あるは是れ無常なるが故なり。「三界の三界を見るが如くならず」[48]とは、仏・如来は真如法身を能く見、能く知ることを謂う。凡夫は見ざるが故なり。是の故に経は「如来は明らかに見て錯謬あることなし」[49]と言うが故なり。

【現代語訳】

三には法身仏の菩提を示す。如来蔵の本性的清浄や涅槃の常住性・恒常性・清涼性・不変性等の意義のことである。経に「如来は［その智慧によって］三界のありさまをありのままに見るからである」から「三界［に住む凡夫］が三界を見るようでもない」とまでにあるように。

「三界のありさま」とは、衆生の世界はすなわち涅槃の世界であるということをいうのである。衆生の世界を離れないで如来蔵があるからである。

「［三界には］生まれたり、死んだりすることはなく、あるいは、消滅したり、出現したりすることもなく」とは、常住性・恒常性・清涼性・不変性のことをいうのである。

「また世に存するとか、涅槃するということもない」とは、如来蔵真如の本体は衆生の世界そのものなのではなく、また衆生の世界を離れるものでもないということをいうのである。

「真実でもなく、虚偽でもなく、そのままのありかたでもなく、別のありかたでもない」とは、［生・住・異・滅の］

四つの相を離れているということをいうのである。四つの相のあるものは無常なるものだからである。

「三界［に住む凡夫］が三界を見るようでもない」とは、仏・如来は真如法身を見ることができ、知ることができるということをいうのである。それ故に『［法華］経』は「如来は明らかに見て、誤りがあることはない」というのである。

37 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
38 勒那摩提訳には、「等義」のかわりに「故」とある。
39 勒那摩提訳には、「次第」の語を欠く。
40 勒那摩提訳には、「義」の字を欠く。
41 勒那摩提訳では「相」の字の後に「故」の字がある。
42 勒那摩提訳には、「於」の字を欠く。
43 勒那摩提訳には、「謂仏」を欠く。
44 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁下、十三～十五行目）にそのままの形で存する。「如來。如實知見三界之相。無有生死若退若出。亦無在世及滅度者。非實非虚非如非異。不如三界見於三界。」
45 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁下、十三～十四行目）にそのままの形で存する。
46 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁下、十四行目）にそのままの形で存する。
47 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁下、十四～十五行目）にそのままの形で存する。
48 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁下、十五行目）にそのままの形で存する。
49 『妙法華』如来寿量品（『大正蔵』第九巻、四二頁下、十六行目）にそのままの形で存する。

【テキスト】(p.9b,*l*.27-p.9c,*l*.4)

（勒、p.19a,*ll*.2-7）

【書き下し文】

「我れ本、菩薩の道を行じて……今猶お未だ満たず」[56]とは、本願

我本行菩薩道今猶未滿者。以本願故。衆生界未尽願非究竟故。言未滿[50]非謂菩提不滿足也[51]。所成寿命復倍上数者。此文[52]示現如来命常善巧[53]方便顯多数故[54]。過上数量不可数知。我浄土不毀而衆見焼尽者。報仏如来真実浄土。第一義諦之所摂[55]故。

を以ての故なり。衆生界未だ尽きざれば、願は究竟にあらざるが故に。「未だ満せず」[57]と言うは、菩提の不満足なることを謂うにあらざるなり。

「成せし所の寿命は復た上の数に倍せり」[58]とは、此の文、如来の命は常に善巧方便もて多数を顕わす故に、上の数量を過ぎて数え知るべからざることを示現す。

「我が浄土は毀れずして而も衆は焼け尽きて……見る」[59]とは、報仏如来の真実の浄土は第一義諦の所摂なるが故なり。

【現代語訳】

「私はもともと、菩薩としての修行を行って［その菩薩行は］今もなお満ちていない」のは、本願の故である。衆生の世界は未だ尽きていないので［私の本］願は成就していないからである。「満ちていない」と［仏が］言っているのは菩提が満足していないということをいうのではない。

「獲得した寿命は、［先の］数の二倍の寿命があるのだ」と［経は説くが］、この文句は、如来の寿命は常に善巧方便によって多くを現わすので先の数量を越えていて、数え知ることができないということを示している。

「私の浄らかな国土はこわれることはないのに、しかし、人々は［この国土は劫火に］焼け尽くされて［憂いや恐怖、さまざまな苦悩、そのようなものが充満していると］見るのだ」というのは、報仏如来の真実の浄土は第一義諦に含められる［ということをいうのである］。

50 勒那摩提訳では「滿」の字の後に「者」の字がある。
51 勒那摩提訳には、「也」の字のかわりに「故」とある。
52 勒那摩提訳には、「此文」の語を欠く。
53 勒那摩提訳には、「善巧」の語を欠く。
54 勒那摩提訳には、「故」の字を欠く。
55 勒那摩提訳には、「之所」を欠く。
56 『妙法華』如来寿量品にほぼ同じ一節があるが語句の異同がある。『妙法華』の経文は「我本行菩薩道所成壽命。今猶未盡」(『大正蔵』第九巻、四二頁下、二二〜二三行目)となっている。
57 前注のように、『妙法華』では「未尽」となっている。
58 『妙法華』如来寿量品に一致する文句があるが、語句の順序が異なっている。『妙法華』の経文は「所成壽命。今猶未盡復倍上數。」(『大正蔵』第九巻、四二頁下、二二〜二三行目)とある。
59 『妙法華』如来寿量品(『大正蔵』第九巻、四三頁下、十二行目)にそのままの形で存する。「我淨土不毀　而衆見燒盡　憂怖諸苦惱　如是悉充滿」

九無上・十無上

【テキスト】(p.9c,*ll*.4-6)　　【書き下し文】

(勒、p.19a,*ll*.7-9)

九者示現涅槃無上故説医師譬喩。十者示現勝妙力無上故。自余経文示現[60]応知。

九には涅槃の無上[61]を示現するが故に、医師の譬喩を説く。十には勝妙力の無上[62]を示現するが故に、自余の経文もて示現す。応に知るべし。

【現代語訳】

第九には涅槃の無上を示すために、［如来寿量品の中で］医師の譬喩を説くのである。

第十には勝妙なる力の無上を、その他の経文によって示している。［このことを］知らなければならない。

60 勒那摩提訳では「自余経文示現」を「説余残修多羅」とする。

61 吉蔵は「小乗灰身滅智實入無餘。此是有上涅槃。今爲狂子方便言滅三德涅槃。實非永滅故是無上。」（『大正蔵』第四十巻、八二二頁上）と注釈している。

62 吉蔵は「言勝妙力無上者。共歎法華有勝妙巧用。故名之力也」（『大正蔵』第四十巻、八二二頁中）と注釈している。

多宝如来塔

【テキスト】（p.9c, *ll*.6-19）

（勒、p.19a, *ll*.9-20）

多宝如来塔示現[63]一切仏土清浄者。示現諸仏実相境界中種種諸宝[64]間錯荘厳故。示現有八。一者塔・二者量・三者略・四者住持・五者示現無量仏・六者離穢・七者多宝・八者同一塔坐[65]。塔者。示現如来舎利住持故。量者。方便示現一切仏土[66]清浄荘厳[67]。是[68]出世間清浄[69]。無漏善根

【書き下し文】

多宝如来の塔、一切の仏土の清浄を示現すとは[83]、諸仏の実相境界の中に種種の諸宝は間錯して荘厳せることを示現するが故なり。示現に八あり。

一には塔、二には量、三には略、四には住持、五には示現無量仏、六には離穢、七には多宝、八には同一塔坐なり。

塔とは如来の舎利の住持を示現するが故なり。

所生。非是世間有漏善根之[70]所生也[71]。略者。示現多宝仏[72]身一体[73]摂取一切諸仏[74]真法身[75]故。住持[76]者。示現諸仏如来法身自在力故。示現無量仏者。示現彼此所作諸業[77]無差別故。遠離穢[78]者。示現一切諸[79]仏国土平等清浄故。多宝者[80]。示現一切諸仏国土[81]同実[82]性故。同一塔坐者。示現化仏非化仏法仏報仏等皆為成大事故。

量とは方便もて一切仏土の清浄荘厳を示現するなり。是れ出世間の清浄にして無漏の善根の所生なり。是れ世間の有漏の善根の所生にあらざるなり。[84]

略とは多宝仏の身は一体もて一切諸仏の真の法身を摂取するを示現するが故なり。

住持とは諸仏・如来の法身の自在力を示現するが故なり。[85]

無量の仏を示現するとは、彼此の所作の諸の業の差別なきことを示現するが故なり。[86]

穢を遠離すとは、一切諸仏の国土は平等にして清浄なるが故なり。[87]

多宝とは一切諸仏の国土の同宝[88]性を示現するが故なり。

同一の塔に坐するとは、化仏・非化仏[89]・法仏・報仏等は皆な為に大事を成ずることを示現するが故なり。

【現代語訳】

［先に］多宝如来の塔はすべての仏国土の清浄性を示していると［言ったが、それ］は、仏たちの実相境界において様々な宝が入り交じって荘厳されているということを示している。それは八様に示される。

一には塔［そのもの］によって、二には［塔の］量によって、三には略することによって、四には［仏法を］住持することによって、五には量り知れないほど多くの仏たちを示し現すことによって、六には穢れを離れていることに

よって、七には多宝であることによって、八には同一の塔に坐すことによって［示されるの］である。

［多宝如来］塔［そのもの］は、如来の舎利を住持することを示している。

［多宝如来塔の］量は、方便によってすべての仏国土の清浄性・荘厳性を示している。これは世間的な清浄性を超越していて、無漏の善根から生じるものである。これは世間的な有漏の善根から生じるものではない。略することというのは、多宝仏の身体はただ一体だけであらゆる仏たちの真実の法身を摂め取っていることを示している。

［仏法を］住持することとは、仏・如来たちの法身の自在力を示している。

量り知れないほど多くの仏たちを示し現すこととは、かの［十方の分身仏］とこの［釈迦仏］が、作した多くの行いには差別がないということを示している。

穢れを離れていることとは、すべての仏国土は平等であり清浄であることを示している。

多宝であることとは、すべての仏たちの国土の宝は同じであることを示している。

同一塔に坐すこととは、化仏や非化仏、法仏や報仏などはみな大事を成就するということを示している。

63　勒那摩提訳では「示現」を顕示とする。
64　勒那摩提訳には、「諸宝」の語を欠く。
65　勒那摩提訳には、「示現有八」以下「同一塔坐」までを欠く。
66　勒那摩提訳では「仏国土」とする。

67 勒那摩提訳には、「荘厳」の語を欠く。
68 勒那摩提訳には、「是」の字を欠く。
69 勒那摩提訳には、「清浄」の語を欠く。
70 勒那摩提訳には、「根之」を欠く。
71 勒那摩提訳では「也」の字のかわりに「故」の字がある。
72 勒那摩提訳には、「示現」の語を欠く。
73 勒那摩提訳では「仏」を「如来」とする。
74 勒那摩提訳では「体」の字の後に「示現」の語がある。
75 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
76 勒那摩提訳には、「真」の字を欠く。
77 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
78 勒那摩提訳には、「穢」の字の後に「不浄」の語がある。
79 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
80 勒那摩提訳では「言多宝者」とする。
81 勒那摩提訳では「一切仏土」とする。
82 勒那摩提訳では「実」の字を「宝」とする。また吉蔵所引の文句も「同宝」である。ここは文脈から考えても「宝」の方がふさわしく、テキストは誤植と思われる。
83 上述の「五者示現清浄国土無上故示現多宝如来塔」を承けている。
84 吉蔵は「量有二義。一者土果形量。謂一一方四百萬億那由他土果形量。二者因量。謂無漏善根生非有漏善根起也」(『大正蔵』第四十巻、八二二頁下)と注釈している。
85 吉蔵は「諸佛法身自在身力者。此釋多寶於十方世界涌現及發聲歎佛之事。以法身遍一切處故。能於一切處有此功徳。住持佛法故爲住

持也」（『大正蔵』第四十巻、八二三頁上）と注釈している。

86 吉蔵は「云示現彼此所作諸業無差別故。釋意明示現十方分身佛。故目之爲彼。釋迦之身稱之爲此。亦得十方分身相望自爲彼此。十方諸佛同欲弘道利人。故云十方諸佛所作諸業無有差別也。又十方分身佛同住淨土同説一乘同化菩薩。即是顯諸佛道同。故名所作業無差別。諸佛道既同故。當知今日釋迦亦同諸佛」（『大正蔵』第四十巻、八二三頁上）と注釈している。

87 吉蔵は「即是釋經中移諸天人及山海事也」（『大正蔵』第四十巻、八二三頁上）と注釈している。なおこの文句は、『妙法華』見宝塔品（『大正蔵』第九巻、三三頁上中）の一節と指すと思われる。

88 勒那摩提訳に従い「実」の字を「宝」と改める。

89 吉蔵所引の文句には「非化仏」の語を欠いている。（『大正蔵』第四十巻、八二三頁上）

第十勝妙義（法力・持力・修行力）

法力

【テキスト】（p.9c,*ll*.21-25）

（勒、p.19a,*ll*.20-24）

自此已下示現法力持力修行力応知。法力者。五門示現。一者証門[90]。二者信門[91]。三者供養門[92]。四者聞法門[93]。五者読誦持説門[94]。弥勒菩薩品中示現四門[95]。常精進菩薩品中示現一門[96]。

【書き下し文】

此れより已下、法力[101]と持力と修行力とを示現す。応に知るべし。法力とは五門もて示現す。一には証門、二には信門、三には供養門、四には聞法門、五には読誦持説門なり。弥勒菩薩品中に四門を示現す。常精進菩薩品中に一門を示現す[102]。

【現代語訳】

これ以下は、法の力と保持する力と修行の力を示す。［このことを］知らなければならない。

法の力とは、五つの観点によって示される。一にはさとりという観点、二には信仰という観点、三には供養という観点、四には教えを聞くという観点、五には［経を］読み・誦し・保持し・説くという観点である。

四つの観点については［『法華経』の］弥勒菩薩品（『妙法華』分別功徳品に相当すると思われる）の中で示されている。一つの観点については［『法華経』の］常精進菩薩品（『妙法華』の法師功徳品に相当すると思われる）の中で示されている。

90 勒那摩提訳では「五」の字の後に「種」の字がある。
91 勒那摩提訳には、「門」の字を欠く。
92 勒那摩提訳には、「門」の字を欠く。
93 勒那摩提訳には、「門」の字を欠く。
94 勒那摩提訳には、「門」の字を欠く。
95 勒那摩提訳には、「門」の字を欠く。
96 勒那摩提訳では「弥」の字の前に「四種門」とある。
97 勒那摩提訳には、「四門」の語を欠く。
98 勒那摩提訳では「常」の字の前に「一法門」とある。
99 勒那摩提訳には、「中」の字を欠く。
100 勒那摩提訳には、「一門」の語を欠く。
101 吉蔵は「法即是法華之法有勝功用。故稱法力」（『大正蔵』第四十巻、八二三頁中）と注釈している。
102 「弥勒菩薩品」は『妙法華』では「分別功徳品」に、「常精進菩薩品」は「法師功徳品」に相当する。吉蔵は「彌勒品即是分別功徳品。常精進品即法師功徳品。此二従人以立名」（『大正蔵』第四十巻、八二三頁下）と注釈している。

証門

【テキスト】(p.9c,*l*.25-p.10a,*l*.6)

(勒、p.19a,*l*.24-p.19b,*l*.4)

弥勒菩薩品中四法門[103]者。一是証門[104]。如経我説是如来寿命長遠時六百八十万億那由他恒河沙等[105]衆生得無生法忍故。此言無生法忍者。所[106]謂初地証智応知。八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂証初地菩提法[107]故。八生[108]一生者。謂諸凡夫決定能証初地故[109]。随力随分。八生乃至一生皆[110]証初地故。此[111]言阿耨多羅三藐三菩提者。以離三界[112]分段生死。随分能見真如法性[113]名得菩提。非謂究竟満足如来方便涅槃也[114]。

【書き下し文】

弥勒菩薩品中の四法門とは、一には是れ証門なり。経の如く[115]「我、是の如来の寿命の長遠なるを説く時、六百八十万億那由多恒河沙等の衆生は無生法忍を得る」が故なり。此の「無生法忍」と言うは、いわゆる初地の証智なり。応に知るべし。

「八生」乃至「一生に阿耨多羅三藐三菩提を得[116]」とは、初地の菩提法を証するを謂うが故なり。「八生」「一生」とは、諸の凡夫は決定して能く初地を証するを謂うが故なり。力に随い分に随って八生乃至一生は皆な初地を証するが故なり。

此の「阿耨多羅三藐三菩提」と言うは、三界の分段生死を離れ、分に随って能く真如法性を見るを以て菩提を得ると名づく。究竟して如来の方便涅槃を満足するを謂うにあらざるなり。

【現代語訳】

弥勒菩薩品の中［で示される］四つの法［の力］についての観点とは、一つにはさとりという観点である。経に「私

が、以上のように如来の寿命がはるかに長いということを説いた時に、六百八十万億那由多のガンジス河の砂の数に等しい数の衆生たちが、あらゆるものは不生不滅であるというさとりを体得した」とあるように。

この「あらゆるものは不生不滅であるというさとり」というのは、すなわち、初地のさとりの智である。［このことを］知らなければならない。

「八度生まれかわった後に」から「一度生まれかわった後に、必ずや無上の正しいさとりを獲得するであろう」までは、初地のさとりの法をさとったことをいうのである。

「八度生まれかわる」「一度生まれかわる」とは、凡夫たちは必ず初地をさとることができるということをいうのである。能力に応じて分際に応じて「八度生まれかわる」者たちや「一度生まれかわる」者たちは、みな初地をさとるからである。

この「無上の正しいさとり」とは、三界における身体ある凡夫の生死を離れて、分際に応じて真如法性を見ることを菩提と名づけている。如来の方便としての涅槃を完全に満足していることをいうのではないのである。

103 勒那摩提訳では「四法門」を「四種門」とする。
104 勒那摩提訳には、「門」の字を欠く。
105 勒那摩提訳には、「等」の字を欠く。
106 勒那摩提訳には、「所」の字を欠く。
107 勒那摩提訳には、「法」の字を欠く。
108 勒那摩提訳では「八生」の語の後に「乃至」の語がある。

109 勒那摩提訳には、「故」の字を欠く。
110 勒那摩提訳には、「皆」の字を欠く。
111 勒那摩提訳には、「此」の字を欠く。
112 勒那摩提訳では「界」の字の後に「中」の字がある。
113 勒那摩提訳では「法性」の語のかわりに「仏性」の語がある。菩提留支訳でも「仏性」とするテキストもあった可能性がある。吉蔵所引の文句は「仏性」としている。(『大正蔵』第四十巻、八二四頁上)
114 勒那摩提訳では「也」の字のかわりに「故」とある。
115 『妙法華』分別功徳品(『大正蔵』第九巻、四四頁上、八～十行目)にほぼそのままの形で存する。「恒河沙等衆生」は『妙法華』では「恒河沙衆生」とあり、「等」の字を欠く。
116 『妙法華』分別功徳品(『大正蔵』第九巻、四四頁上、十七～二四行目)に存する。「八生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有四四天下微塵數菩薩摩訶薩。四生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有三四天下微塵數菩薩摩訶薩。三生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有二四天下微塵數菩薩摩訶薩。二生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有一四天下微塵數菩薩摩訶薩。一生當得阿耨多羅三藐三菩提。」

信門・供養門・聞法門

【テキスト】(p.10a, *ll.*7-11)

(勒、p.19b, *ll.*4-8)

二是信門[118]。如経復有八世界微塵数[119]衆生皆発阿耨多羅三藐三菩提心故。三供養門[120]。[121]如経是諸菩薩摩訶薩得大法利時於虚空中雨曼陀羅華如

【書き下し文】

二には是れ信門なり。経の如く[125]「復た八世界の微塵数の衆生有って皆な阿耨多羅三藐三菩提を発す」が故なり。

三には供養門なり。経の如く[126]「是の諸菩薩摩訶薩の大法利を得る

是等故。四[122]聞法門[123]。如随喜品所[124]説応知。

時、虚空中に於いて曼陀羅華を雨らす」是くの如き等の故なり。四には聞法門なり。随喜品[127]の所説の如し。応に知るべし。

【現代語訳】

二つには、信という観点である。経に「また、八つの世界を微塵にしたその数と等しい数の衆生たちがいて、彼らはみな無上の正しいさとりへと向かう心を発したのだ」とあるように。

三つには、供養という観点である。経に「仏が、これら多くの菩薩大士たちが大いなる法の利益を得るということを説かれた時、虚空から曼陀羅の花と摩訶曼陀羅の花とが雨のように降ってきて」とこのようにあるように。

四つには、教えを聞くという観点である。随喜品に説かれる如くである。［このことを］知らなければならない。

117 勒那摩提訳には、「二是」を欠く。
118 勒那摩提訳では「門」の字を「者」とする。
119 勒那摩提訳には、「数」の字を欠く。
120 勒那摩提訳には、「三」の字を欠く。
121 勒那摩提訳では「門」の字を「者」とする。
122 勒那摩提訳には、「四」の字を欠く。
123 勒那摩提訳では「門」の字を「者」とする。
124 勒那摩提訳には、「所」の字を欠く。
125 『妙法華』分別功徳品（『大正蔵』第九巻、四四頁上、二四～二五行目）にそのままの形で存する。
126 『妙法華』分別功徳品（『大正蔵』第九巻、四四頁上、二五～二六行目）にそのままの形で存する。

127 『妙法華』の随喜功徳品に相当する。吉蔵は「問。前云屬彌勒品。今云何屬隨喜品。答。隨喜品初至彌勒問隨喜。依此義亦得稱爲彌勒品。若從隨喜義立名稱隨喜。故不相違也。」（『大正蔵』第四十巻、八二四頁中下）と注釈している。

読誦持説門

【テキスト】（p.10a, *ll*.12–24）

（勒、p.19b, *ll*.8–19）

常精進菩薩品中。一法門者[128]。謂読誦解説書写等。得六根清浄[129]。如経若善男子善女人受持法華経若読若誦若解説若書写。是人当得八百眼功徳次第[130]乃至得[131]千二百意功徳故。此得六根清浄者。謂諸[132]凡夫[133]以経力故得勝根用。未入初地菩薩正位此義[134]応知。如経以父母所生清浄肉眼見于[135]三千大千世界如是等故[136]。又六根清浄者。於一一根中悉能具足。見色聞声弁[138]香別[139]味覚[140]触知[141]法[142]。諸根互[143]用此義[144]応知。眼所見者聞香能知。如経釈提桓因在勝殿上五欲娯楽乃至説法故。聞香知者。此是知[146]境以[147]鼻根知故。

【書き下し文】

常精進菩薩品中の一法門とは、読誦・解説・書写等は六根の清浄を得るを謂う。経の如く[148]「若しは善男子・善女人の、法華経を受持し若しは読み若しは誦し若しは解説し若しは書写せば、是の人は当に八百の眼の功徳を得」より次第して、乃至「千二百の意の功徳を得べき」が故なり。

此の「六根の清浄を得[149]」とは、諸の凡夫は経の力を以ての故に勝根の用を得るを謂うなり。未だ初地の菩薩の正位に入らざるなり。此の義応に知るべし。経の如く[150]「父母所生の清浄なる肉眼を以て三千大千世界を見る」と、是くの如き等の故なり。

又た「六根の清浄」とは、一一の根の中に於いて悉く能く具足して色を見、声を聞き、香を弁じ、味を別し、触を覚し、法を知るなり。諸の根は互いに用う。此の義応に知るべし。眼もて見られ

たる所のものは香を聞きて能く知る。経の如く[151]「釈提桓因は勝殿の上に在って五欲に娯楽し」乃至「説法す」るが故なり。「香を聞き知る[152]」とは、此れは是れ知の境にして、鼻根を以て知るが故なり。

【現代語訳】

常精進菩薩品の中［に示される］、法についての観点の一つとは、すなわち、［『法華経』の］読誦、解説、書写等は六つの器官を清浄にするということである。経の「もし善男子・善女人が、［この］経典を受け保ち、あるいは読み、あるいは誦し、あるいは人に解説し、あるいは書写したならば、その人は必ずや、眼についての八百の徳性」から次第して「心についての千二百の徳性を得ることであろう」とまでにあるように。

この「六つの器官の清浄を得る」とはすなわち、凡夫たちは『［法華］経』の力によって勝れた器官の作用を得るということである。［しかし］初地の菩薩の位階にはまだ入っていないのである。経に「父母から受けたままの清らかな肉眼によって、全宇宙世界の内外をくまなく見るであろう」と、このようにあるように。

また「六つの器官の清浄」とは、一々の器官の中に［六つ］すべての［知覚］能力を具えて、色形を見、音声を聞き、香りをかぎ、味をあじわい、感触を感じ、法を知るということである。器官はそれぞれ互いに作用し合うのである。このことをまさに知るべきである。眼によって見られたものは香りを聞くことによって知られ得るのである。経に「帝釈天が彼の宮殿にあって、五官の欲するままに遊び戯れる［時の匂い］」から「説法する［時の匂い］」までにあるように。「香りを聞いて知る」とは、知るという認識領域のことであり、鼻という器官によって知られるというこ

とである。

128 勒那摩提訳では「一法門。常精進菩薩品示現者」となっている。
129 勒那摩提訳では「浄」の字の後に「故」とある。
130 勒那摩提訳には、「次第」の語を欠く。
131 勒那摩提訳には、「得」の字を欠く。
132 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
133 勒那摩提訳では「夫」の字の後に「人」の字がある。
134 勒那摩提訳には、「正」の字を欠く。
135 勒那摩提訳には、「此義」の語を欠く。
136 勒那摩提訳では「于」の字のかわりに「於」とある。
137 勒那摩提訳には、「故」の字を欠く。
138 勒那摩提訳では「弁」の字のかわりに「知」とある。
139 勒那摩提訳には、「別」の字を欠く。
140 勒那摩提訳には、「覚」の字を欠く。
141 勒那摩提訳には、「知」の字を欠く。
142 勒那摩提訳では「法」の字の後に「等」の字がある。
143 勒那摩提訳には、「諸根互」を欠く。
144 勒那摩提訳には、「此義」の語を欠く。
145 勒那摩提訳には、「所」の字を欠く。
146 勒那摩提訳では「知」の字のかわりに「智」とある。

147 勒那摩提訳には、「以」の字を欠く。

148 『妙法華』法師功徳品（『大正蔵』第九巻、四七頁下、三～七行目）の経文とほぼ一致する。『妙法華』では「法華経」の語の前に「是」の字がある。省略部分も含めて『妙法華』の当該箇所を示せば次の通りである。「若善男子善女人。受持是法華經。若讀若誦若解説若書寫。是人當得八百眼功徳。千二百耳功徳。八百鼻功徳。千二百舌功徳。八百身功徳。千二百意功徳。」

149 『妙法華』法師功徳品の「以是功徳荘厳六根皆令清淨」（『大正蔵』第九巻、四七頁下、七行目）の経文を指すものと思われる。

150 『妙法華』法師功徳品の経文とほぼ一致する。『妙法華』では文頭の「以」の字を欠き、「于」の字を「於」としている。

151 『妙法華』法師功徳品（『大正蔵』第九巻、四八頁下、三～五行目）の経文と一致する。省略部分も含めて『妙法華』の当該箇所を示せば次の通りである。「釋提桓因在勝殿上五欲娯樂嬉戲時香。若在妙法堂上爲精利諸天説法時香。」

152 『妙法華』法師功徳品の経文「聞香悉能知」（『大正蔵』第九巻、四八頁下～四九頁中）に相当すると思われる。

持力

【テキスト】(p.10a,*ll.*24-27)　　【書き下し文】

(勒、p.19b,*ll.*19-22)

持力者。有三[153]法門示現。持力如[154]法師品安楽行品等[155]広説。法力如経[156]応知。其心決定知水必近者。受持此経得仏性水成阿耨多羅三藐三菩提故。

持力とは三の法門有りて示現す。持力は法師品・安楽行品等に広く説くが如し。法力は経の如く当に知るべし。「其の心決定して、水必ず近しと知る[157]」とは、此の経を受持して、仏性の水を得て、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるが故なり。

【現代語訳】

保持する力については、三つの法門によって示されている。保持する力は［経の］法師品や安楽行品などにおいて

広く説かれている如くである。法力は経にあるように知るべきである。

「心にはっきりと、水は必ず近いと知るであろう」とは、この『[法華]経』を受けて保持すれば、仏性という水を得て無上の正しいさとりを成就するということである。

153 勒那摩提訳では「三」の字の後に「種」の字がある。
154 勒那摩提訳には、「持力」の語を欠く。
155 勒那摩提訳では「安楽行品」の後に「勧持品」とある。
156 勒那摩提訳には、「如経」の語を欠く。
157 『妙法華』法師品（『大正蔵』第九巻、三一頁下、十一～十二行目）にそのままの形で存する。

修行力

【テキスト】（p.10a,l.27-p.10b,l.5）　【書き下し文】

（勒、p.19b,l.22-19c,l.4）

修行力者。五門示現。一者説力。二者行苦行力。三者護衆生諸難力。四者功徳勝力。五者護法力。説力者。有三[158]法門。神力品示現。一者出[159]広長舌令[160]憶念故。二者謂[161]謦欬声[162]説偈令聞故。令[163]聞声已如実修行不放逸故。三者[164]弾指覚悟衆生[165]。令修行者得覚悟故。行苦行力者。薬

修行力とは五門もて示現す。

一には説力、二には苦行を行ずる力、三には衆生の諸難を護る力、四には功徳勝力、五には護法力なり。

説力とは三の法門ありて神力品に示現す。

一には広長舌を出して憶念せしむるが故なり。

二には謂く、謦欬の声もて偈を説くは、聞かしむるが故なり。声

王菩薩品示現。[166] 又[167]行苦行力者。妙音菩薩品示現教化衆生故。[168] 護衆生諸難力者。[169][170] 観世自在菩薩品[171]陀羅尼品示現。功徳勝力者。妙荘厳王品示現。二童子[172]依過去世[173]功徳善根。[174] 有如是力故。護法力者。普賢菩薩[175]品及後品示現。

を聞かしめおわりて、如実に修行して不放逸なるが故なり。三には指を弾いて衆生を覚悟せしむるは、修行者をして覚悟を得せしむるが故なり。苦行を行ずる力とは、薬王菩薩品に示現す。又た苦行を行ずる力とは、妙音菩薩品に示現す。衆生を教化するが故なり。

衆生の諸難を護る力とは、観世自在菩薩品と陀羅尼品に示現す。功徳勝力とは、妙荘厳王品に示現す。二童子は過去世の功徳の善根に依りて是くの如き力有るが故なり。護法力とは、普賢菩薩品と及び後の品に示現す。

【現代語訳】

修行の力は五つの観点によって示されている。

一には［教えを］説く力、二には苦行を行う力、三には衆生を多くの困難から護る力、四には功徳の勝れた力、五には教えを護る力である。

［教えを］説く力には三つの観点があって、神力品の中に示されている。

一に、広くて長い舌を出すのは憶念させるためである。

二に、咳払いをして偈を説くのは聞かせるためである。

三に、指を弾いて衆生を目覚めさとらせるのは、修行者に目覚めとさとりを得させるためである。苦行を行う力は薬王菩薩品に示されている。また、苦行を行う力は妙音菩薩品に示されている。衆生を教化するからである。

衆生を多くの困難から護る力は観世自在菩薩品と陀羅尼品に示されている。

功徳の勝れた力は妙荘厳品に示されている。二童子は過去世の功徳の善根によってこのような力があるからである。

教えを護る力は普賢菩薩品と及びそれより以降の品に示されている。

158 勒那摩提訳では「三」の字の後に「種」の字がある。
159 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
160 勒那摩提訳では「令」の字のかわりに「者」とある。
161 勒那摩提訳には、「者謂」を欠く。
162 勒那摩提訳では「声」の字の後に「者」の字がある。
163 勒那摩提訳には、「令」の字を欠く。
164 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
165 勒那摩提訳では「衆生」の語のかわりに「者」とある。
166 勒那摩提訳では「示現」の語の後に「教化衆生」とある。
167 勒那摩提訳には、「又」の字を欠く。
168 勒那摩提訳には、「故」の字を欠く。
169 勒那摩提訳には、「諸」の字を欠く。
170 勒那摩提訳には、「力者」を欠く。

171 勒那摩提訳では「観世音品」とする。
172 勒那摩提訳には、「二童子」の語を欠く。
173 勒那摩提訳には、「世」の字を欠く。
174 勒那摩提訳では「善根」の語のかわりに「彼二童子」とある。
175 勒那摩提訳には、「菩薩」の語を欠く。

受持名号

【テキスト】(p.10b,*ll.*11-21)

(勒、p.19c,*ll.*4-13)

又言受持観世自在菩薩名号[177]。若人[178]受持六十二億[179]恒河沙等諸仏名号[180]福徳等[181]者。有二種義。一者信力故。二者畢竟知故。信力者有二種。一者我身如彼[182]観世自在[183]無異[184]畢竟信故。二者謂於彼[186]生恭敬心。如彼功徳我亦如是[187]畢竟得故。畢竟知者。謂能[188]決定知法界故。言法界[189]者名為[190]法性。彼法性者[191]。名為[192]一切諸仏菩薩平等法身[193][194]。平等身者[195]真如法身。初地菩薩乃能証入[196]。是故受持六十二億[197]恒河沙等諸[198]仏名号[199]。有能[200]受持観

【書き下し文】

又た「観世自在菩薩の名号を受持する［人］」と「若し人、六十二億恒河沙等の諸仏の名号を受持せば……福徳は等し」[204]。と言うは、二種の義あり。

一には信力の故なり。二には畢竟知の故なり。

信力に二種あり。

一には我が身は彼の観世自在の如くして異なることなしとの畢竟の信の故なり。

二には謂く、彼に恭敬の心生じて、彼の功徳の如く我も亦た是くの如く畢竟じて得るが故なりと。

世自在菩薩名号[201][202]。所得[203]功徳無差別。

畢竟の知とは謂く、能く決定して法界を知るが故なりと。法界と言うは名づけて法性と為す。彼の法性とは名づけて一切諸仏・菩薩の平等法身と為す。平等身とは真如の法身なり。初地の菩薩は乃ち能く証入す。

是の故に、六十二億恒河沙等の諸仏の名号を受持し、有るは能く観世自在菩薩の名号を受持するも、得る所の功徳は無差別なり。

【現代語訳】

また、「観自在菩薩の名号を受持する［人］」と「六十二億恒河沙等の諸仏の名号を受持する人……彼ら両者の福徳は等しい」と言う［経文］には二種の意義がある。

第一には信の力である。第二には究極的な知である。

［第一の］信の力には二種ある。

一には、自分自身は観世音菩薩の如きものであって異なっていないのであるという究極的な信［の力］である。

二には、彼（観世音菩薩）に対して恭敬の心を生じれば、私もまた、彼［が得た］功徳のような［功徳］を究極的には得る［という信の力］である。

［第二の］究極的な知とは、すなわち、必ずや法界を知ることができることである。法界とは法性のことを名づけているのである。その法性とはすべての仏・菩薩たちの平等なる法身のことを名づけているのである。平等なる［法］身とは真如の法身である。［この法性に］初地の菩薩は証入できるのである。これ故に、六十二億恒河沙等という仏た

ちの名号を受持する人と、観世音菩薩の名号を受持することができる人とが得る功徳は差別のないものなのである。

176 勒那摩提訳では「自在」の語のかわりに「音」とある。
177 勒那摩提訳には、「号」の字を欠く。
178 勒那摩提訳では「若人」のかわりに「及」とある。
179 勒那摩提訳には、「億」の字を欠く。
180 勒那摩提訳には、「号」の字を欠く。
181 勒那摩提訳では「等」を「平等」とする。
182 勒那摩提訳では「者」の字の後に「求」の字がある。
183 勒那摩提訳には、「彼」の字を欠く。
184 勒那摩提訳では「自在」の語のかわりに「音」とある。
185 勒那摩提訳には、「無異」の語を欠く。
186 勒那摩提訳には、「謂於彼」を欠く。
187 勒那摩提訳には、「如是」の語を欠く。
188 勒那摩提訳には、「謂能」を欠く。
189 勒那摩提訳には、「言」の字を欠く。
190 勒那摩提訳には、「為」の字を欠く。
191 勒那摩提訳には、「者」の字を欠く。
192 勒那摩提訳では「名為」のかわりに「入初地菩薩能証入」とある。
193 勒那摩提訳には、「法」の字を欠く。
194 勒那摩提訳では「身」の字の後に「故」の字がある。

195 勒那摩提訳では「者」の字の後に「謂」の字がある。
196 勒那摩提訳には、「初地菩薩乃能証入」を欠く。
197 勒那摩提訳には、「億」の字を欠く。
198 勒那摩提訳には、「等諸」を欠く。
199 勒那摩提訳には、「号」の字を欠く。
200 勒那摩提訳には、「有能」を欠く。
201 勒那摩提訳では「自在」の語を「音」とする。
202 勒那摩提訳には、「号」の字を欠く。
203 勒那摩提訳には、「所得」の語を欠く。
204 『妙法華』観世音菩薩普門品の「若有人受持六十二億恒河沙菩薩名字。復盡形供養飲食衣服臥具醫藥。於汝意云何。是善男子善女人功徳多不。無盡意言。甚多世尊。佛言。若復有人受持観世音菩薩名號。乃至一時禮拜供養。是二人福正等無異。」（『大正蔵』第九巻五七頁上）に相応する。

跋文

【テキスト】（p.10b,*ll*.22-25）

（勒、p.19c,*l*.14-p.20a,*l*.1）

第一序品示現七種功徳成就。第二方便品有五分示現破二明一。余品如向処分易解。

妙法蓮華経[205][206]憂波提舎巻下[207]

【書き下し文】

第一序品は七種の功徳の成就せるを示現す。第二方便品は五分の示現有りて二を破し一を明かす。余品は向に処分するごとし。解し易し。

妙法蓮華経憂波提舎巻下

【現代語訳】

第一章の序品は、七種の功徳を成就していることを示している。第二章の方便品は五つの部分の示現があって、二つの［教えの乗り物］を退けて一つの［教えの乗り物］を明らかにしている。残りの諸章はすでに扱った如くであって、理解しやすいであろう。

205 勒那摩提訳では「経」の字の後に「論」の字がある。
206 勒那摩提訳では「憂」の字を「優」とする。
207 勒那摩提訳には、「巻下」の語を欠く。